

HOPPO BUNKA KENKYU

Bulletin of the Institute for the Study of North
Eurasian Cultures, Hokkaido University

17

Special Issue to Commemorate the Retirement of the ex-Director
Professor Jiro IKEGAMI from Hokkaido University

Contents

Foreword	Hideo NAGAI
Personal History of Professor Jiro IKEGAMI	i
List of Professor Jiro IKEGAMI's Writings	iii
AALTO, Pentti: Finish Explorers in Yakutia	1
AMANO, Tetsuya: Fundamental Study on the Metal Industry of the Okhotsk Society [†]	19
ASAI, Tohru: Some Remarks on Ainu God*	45
BENZING, Johannes: Doppelt bezügliche Partizipialkonstruktionen im Goldischen (Nanaischen)	63
DOERFER, Gerhard: Das Kamniganische	69
HAYASHI, Kensaku: Torii Ryouzou — the days of his academic pilgrimage — [‡]	77
JANHUNEN, Juha: On the Diphthongs in Nanai	103
KARA, György: Long Vowels in Manchu Loanwords of Dagur	117
MENGES, Karl H.: Some Tungus Etymologies	131
MIYAOKA, Osahito: A. Pinart and his Hyperborean Linguistic Materials*	141
OHYI, Haruo; On the Process of Crystalization of 'Sakhalin Ainu' [‡]	165
OSHIMA, Minoru: On Aleut Word-Formation: Derivational Suffixes*	193
PRITSAK, Omeljan: On the Tunguz Numeral <i>Nadan</i> 'Seven'	205
SAEKI, Arikaio; A Study of the History of the Ancient <i>Emishi</i> *	213
TSUMAGARI, Toshiro: The Phonemic System of Dagur Mongolian (Hailar Dialect) [†]	227

(* = In Japanese with English Summary.)

Published by

The Institute for the Study of North Eurasian Cultures
Faculty of Letters, Hokkaido University
Sapporo, Japan

1 9 8 5

北方文化研究

第 17 号

池上二良教授退官記念号

目 次

序	永井秀夫
池上二良教授経歴	i
池上二良教授著述目録	iii
Finnish Explorers in Yakutia	Pentti Aalto 1
オホーツク社会のメタル・インダストリー に関する基礎的考察	天野哲也 19
アイヌ語の断片「カムイ」雑感	浅井亨 45
Doppelt bezügliche Partizipialkonstruktionen im Goldischen (Nanaischen)	Johannes Benzing 63
Das Kamniganische	Gerhard Doerfer 69
鳥居龍蔵——その「修業」時代——	林謙作 77
On the Diphthongs in Nanay	Juha Janhunen 103
Long Vowels in Manchu Loanwords of Dagur	Kara György 117
Some Tungus Etymologies	Karl H. Menges 131
A. ビナールと極北諸語関係資料	宮岡伯人 141
「サハリン・アイヌ」の形成過程	大井晴男 165
アリュート語の語構成——派生接尾辞——について	大島稔 193
On the Tunguz Numeral <i>Nadan</i> 'Seven'	Omeljan Pritsak 205
古代蝦夷史についての一考察 ——「エミシ」の用字を中心として——	佐伯有清 213
ダグール語ハイラル方言の音韻体系	津曲敏郎 227

北海道大学文学部附属

北方文化研究施設

1 9 8 5

ダグール語ハイラル方言の音韻体系

津 曲 敏 郎

The Phonemic System of Dagur Mongolian (Hailar Dialect)

Toshiro Tsumagari

0. はじめに

モンゴル系諸言語の一つであるダグール語について、その話し手から直接調査する機会を得たので、成果の一部を以下に報告する。調査は基礎語彙採集を中心に行なったが、語彙全体の発表は別の機会に譲り、本稿ではそこから帰納されるこの言語の音韻体系について考察することとしたい。

インフォーマントは中国籍の男性。1939年、内蒙古自治区呼倫貝爾盟鄂温克族自治旗の生まれで、両親ともダグール族。家庭でも外でもダグール語を使用して育ち、小学校からは蒙古語（内蒙古方言）で教育を受けたという。12歳以後中国語を学び始めて、現在ダグール語・蒙古語・中国語を使用するほか、ロシア語・日本語を理解する。

調査は1983年9月から翌年2月にかけて、インフォーマントが研究員として滞在中の札幌で行なった。『アジア・アフリカ言語調査票』の調査項目にそって1,000項目の聞きとり・録音を行なったが、時間の制約と筆者の力量不足から分析が十分すまぬうちにインフォーマントの帰国を迎えなければならなかったのは残念である。

インフォーマント自身、ダグール語が大興安嶺を境に東の「ブトハ方言」と西の「ハイラル方言」とにわかれ、みずからは後者であるという認識をもっている。そのほか新疆維吾爾自治区にも一部のダグール族が居住しているという¹⁾。

ダグール語に関する記述として、古くは Ивановский 1894の資料が知られており、貴重ではあるが量的にも十分でないうえ、表記の不正確さも指摘されている (Понне 1930 p. 2)。音韻・文法・語彙を含むまとまったものは比較的少なく、Понне 1930, Martin

1) ダグール族の分布・現況等については仲1982 pp. 1-2 の記述が新しい。ただしそこでの方言

区分は上と異なる。また Jernakov 1974には簡単な民族誌的記述がある。

1961, 仲1982 (以下それぞれ P, M, Z と略称) があげられるにすぎない。このうち後二者はプトハ方言を対象としており、ハイラル方言に関してはP以後、その現況を伝える記述は少ない。それだけにPの綿密な記述はきわめて貴重であるが、音韻分析の観点からは音声表記と音韻表記の区別が分明でなく、その点での古さは否めない。これに対してM, Zでは明確に音韻論的立場がとられており、本稿でもこれらと比較しながら論をすすめるところが多い。むろん方言の違いはあるが、もともと方言間の差異はさほど大きくなく²⁾、少なくとも音韻体系に関しては重大な相違はないとみられる。すなわちM, Zと本稿との間に見出される違いは体系そのものの違いではなく、多くは解釈上の相違であるといえることができる。

1. 子音と半母音

1. 1 子音

本稿では次のような子音音素をたてる。

p	t	č	k
b	d	ǰ	g
m	n		ŋ
	s	š	x
	r		
	l		
(w		j)	

これはM, Zと次の点でのみ異なる。Mは半母音音素 /w, j/ を立てないほか (本稿1. 2参照), 本稿の /ŋ/ (音節末にのみ立つ) の代わりに "syllabic nasal" /n̩/ を立てる。これは単に表記上の違いではなく、これによって子音の前の鼻音の異音 ([m]~[n]~[ŋ]等) を代表させるのみならず、一種の形態素境界的な役割をも担わせようとするものようである。しかしながら少なくとも筆者の資料においては、子音の前の鼻音すべてが後続子音によって条件づけられるのではない: [aŋnewe:] 《狼をする》, [kimtʃi] 《爪》。したがって筆者は /m/, /n/ と並んで /ŋ/ を立てる必要性を認める。M自身この /n̩/ について、結局通常の表記では /n/ で代用しうることをみずから認めるという不徹底さがある³⁾。

2) Z. p. 1 参照。なおハイラル方言の顕著な特徴として、他方言では保存されている古い語頭の x の消失が知られている (P. p. 2, Poppe 1955

p. 17)。例: əki 《頭》, P. *id.*; M. xəki, Z. xəkj.
3) M. pp. 18-19, p. 21 参照。また音節末の /ŋ/ については服部1951 pp. 83-84, p. 87 も参照。

一方Zの示す子音体系は筆者のものと基本的に同じであるが、そこではさらに中国語からの借用語にのみ現われる音素として /f, dz, tʂ, ʂ, ʐ/ が加えられている。筆者の調査語彙中にも中国語からの借用語はみられたが、その範囲ではそのために特別の音素を立てる必要は認めなかった。

なお /p-b/, /t-d/, /č-j/, /k-g/ それぞれの対立についてM, Zとも有気-無気の対立とみるが、筆者の耳にはむしろ無声-有声の対立としたほうがふさわしいように思われた。

以下に個々の子音につき、異なる環境に現われた語例をあげておく。語例では一般に音韻表記であることを示す / / を省略する。参考までに P, M, Z で該当する語があれば並記する⁴⁾。

/p/: 中国語 (Ch と略) や満州語 (Ma と略) からの借用語に現われた例が多いが、固有語にもある。paidə- 《並べる》 (P. paida-, Ma. faida-), pəŋnə- 《突く》; taipiq 《平穩な》 (P. id, Ch. 太平 taiping, Ma. taifin), umpaa- 《泳ぐ》 (P. id., M. unpaā-, Z. xompaa-).

/b/: 母音間では多く摩擦音 [β]。bari- 《つかむ》 (PMZ. id.); tabi 《五十》 (M. id., P. tawi, Z. tabj), gəbči 《しかし》 (M. gəbəči).

/m/: maŋgilə 《額》 (PZ. maŋgil); namərə 《秋》 (P. namar, M. namarə, Z. namər), kimči 《爪》 (P. kim(i)či, M. kiməči, Z. kimč).

/t/: tərə 《あれ、それ》 (PM. id., Z. tər); xataa 《塩》 (P. id., MZ. kataa).

/d/: dagii 《再び》 (P. id., M. daiəə, Z. dagee); uduru 《日》 (PZ. udur, M. udurə), ujidə- 《見られる》 (P. ujidu-, M. ujidəə-).

/n/: nəkə 《→》 (M. id., P. nək~nəg~nik, Z. nək); ənə 《これ》 (MZ. id., P. ən(ə)), əndugu 《卯》 (P. ənduug, M. ənduxə, Z. əndugw).

/s/: suni 《夜》 (M. id., P. sun'(i), Z. sunj); bəsə 《帯》 (PM. id., Z. bəs).

/r/: 弾き音またはふるえ音。語頭には立たない。xari- 《帰る》 (PMZ. id.), ərta 《早い》 (P. id., M. ərətə, Z. ərđ).

/l/: larči 《葉》 (P. id., M. lariči, Z. larč); aləgə 《網》 (M. aləxə, Z. aləg), ildəə 《床》 (P. id., M. šilədəə).

4) 本稿での統一をはかるため、原表記のむ図をそこなわない範囲で次のような改変を加えた。Pではロシア字等をローマ字に直し、多くの補助記号を省略した。ただし i 以外の母音の前での子音 (č, j, ʂ を除く) の口蓋化記号' はいか、し、また長音符は母音字を重ねて表わした。Mの e, c, j, h はそれぞれ ə, č, j, x に改めた。

Zの tʂ, dz, ʂ は č, j, ʂ に改めた。なお Pで該当する語形が見当たらない場合は、Poppe 1934も参照した(P' と略記)。これは満州字によって記録されたハイラル方言語彙の紹介であるが、引用にあたっては Poppe 自身の解釈を含む表記によらず、原満州字の転写に従う。その際 Mollendorff 式転写ローマ字の一部を改めた。

- /č / : čosə 《血》 (M. *id.*, PZ čos); iči- 《行く》 (PM. *id.*, Z. ič-).
- /j / : ĵurugu 《心臓》 (P. ĵurug(u), M. ĵurəxə, Z. ĵurug); kəjəə 《いつ》 (P. *id.* ~kəjəe, M. xəjəə, Z. xəjəe).
- /š / : šarə 《黄色》 (P'Z. šar, M. šari); udiši 《昨日》 (P'. *id.*, M. udəši, Z. udiš).
- /k / : kəli 《舌》 (P. *id.*, M. xəli, Z. xəlj); ukuru 《牛》 (P. ukur, M. xukurə, Z. xukur).
- /g / : 母音間では摩擦音 [ɣ]。gəri 《家》 (M. *id.*, P. gər(i), Z. gərj); igə 《大きい》 (P. jig(ə), M. šixə, Z. xig), bugdə 《全部》 (M. bugədə).
- /ŋ / : 音節末にのみ現われる。語末に立ちうる。aŋnə- 《猟をする》, ulaaŋ 《赤い》 (P. *id.*, MZ. xulaan).
- /x / : xaanaə 《どこ》 (MZ. *id.*, P. xaana); toxələ 《子牛》 (M. tokoli, Z. tokulj).

1. 2 半母音

半母音音素として /w, j/ を立てる。これらは通常の子音と同様に語頭や母音間に立つほか、子音の直後に立って先行子音の唇音化および口蓋化を示す点が特殊である。唇音化子音、口蓋化子音をこのように /Cw, Cj/ と解釈する点ではZも同様である。ただしZは語末にもそのような結合を認めるが、筆者は音節の頭にしか認めない（後述3.1参照）。一方Mはいずれの場合も半母音を立てず下の例にみるように母音の結合と解釈する。

はじめに通常の子音と同じ位置に立った例をあげる。

- /w / : wanə- 《落ちる》 (P. woana-, M. uanə-, Z. wannə-), wəərəə 《自分》 (P. wəərii, M. uəər(i)əə, Z. wəər(ee)); uwaa- 《洗う》 (M. uaa-, Z. waa-), taawu 《五》 (PM. taau, Z. taaw).

- /j / : jasə 《骨》 (PZ. jas, M. iasə), juguu 《なぜ》 (PZ. *id.*, M. iuuu); xaujaaraa 《全部》 (P. *id.*, M. xauiarə), bajin 《富んだ》 (P. *id.*, M. bain, Z. bajin).

次に先行子音と結合したもののうちまず /Cw/ についてみる。

- /tw / : twalčigə 《膝》 (P. tol'čig, M. tuarəčixə, Z. twalčig).
- /dw / : dwarələ- 《好きだ》 (P. doaral-, M. duarələ-, Z. dwarlə-).
- /sw / : swarə 《蚤》 (M. suarə, Z. swar).
- /čw / : čwaanguraa- 《(鳥が) さえずる》.
- /šw / : šwəirun 《缸》 (P'. sajarun, Z. šeeruu).
- /kw / : kwəəsə 《泡》 (P'. kuwəsə, M. xuəəsə, Z. xwəəs).

/gw/ : gwarəbə 《三》 (P. goarwa, M. guarəbə, Z. gwarəb); dilgwoo 《蠅》 (M. dil(ə)uəə, Z. dilgwəə).

/xw/ : xwarə 《雨》 (P. xoar(a), M. xuarə, Z. xwar).

以上の子音と結合した例が見出された。/gw/ 以外は語頭の例のみである。また後続母音として /u, i/ は続かない。Z では他に語頭で /bw/, /mw/, /lw/ の例があげられている (Z. pp. 6-7) が、筆者の資料では確認できない。

/Cj/ については次のような例が見出された。

/bj/ : bjaldəmə 《なめらか》 (cf. Z. bjal, bjallæg); xobjəi- 《わかる》 (M. xoboo-, Z. xobee-).

/mj/ : mjagə 《肉》 (P. m'aga, M. miaxə, Z. mjag).

/tj/ : tjawuulu- 《踊る》; kučitjəi 《強い》 (M. kučitəi, Z. kučitii, kočitii).

/dj/ : udjəiŋ 《まだ～しない》 (M. udiən).

/nj/ : njombusə 《涙》 (P. n'ombos, M. nioləmosə, Z. njombus, njommus); monjoo 《猿》 (Z. *id.*, P. mon'oo, M. monioo).

/rj/ : arjuuŋ 《清潔な》 (P. arun, M. arən, Z. aruŋ).

/lj/ : liibai ljuu 《土曜日》 (Ch. 礼拝六 libailiu); tauljəi 《兎》 (P. taul'ee, Z. taulj).

/kj/ : kjandə 《安い》 (M. kaində, Z. kjand); tuutukjəi 《鳩》 (M. tu(u)təkiəə).

/gj/ : gjadə 《槍》 (M. giaidə, Z. gjad); dolgjəiŋ 《波》 (P. dolg'eeŋ, M. doləgiən).

語頭以外では /Cjəi/ の例が多いが、これは [e:] という発音（通常長母音のみで現われ、先行子音の口蓋化を伴う）に対する一つの解釈である（後述 2.3 参照）。なお各子音とも /i/ の前では自然な口蓋化を伴い、/Ci/ - /Cji/ の対立はないので、後者は認めず前者のように解釈する。また /č, ʃ, š/ の直後にも /j/ は立たない。

2. 母音

2.1 第一音節の短母音

母音音素として次の五つを立てる。

i u
ə o
a

Mもこれと同様である。Zはこのほかに /e/ を立て、さらに中国語借用語にのみ現われ

る母音として /y, i/ を認める⁵⁾。

第一音節ではこの五つの短母音が互いに明瞭に区別されている。ちなみに次のような最小対 (minimal pair) が見出された。

/a/—/ə/	: amə 《口》 — əmə 《女》.
	gari 《手》 — gəri 《家》.
	aləgə 《網》 — ələgə 《肝蔵》.
/a/—/o/	: gali 《火》 — goli 《粉》.
/o/—/u/	: nogu 《大》 — nugu 《穴》.
	goči 《三十》 — guči 《友達》.
/i/—/u/	: ilaəŋ 《光》 — ulaəŋ 《赤い》.
/i/—/o/—/u/	: iru 《刃》 — oru 《場所》 — uru 《種》.

2. 2 非第一音節の短母音

多くのモンゴル系諸言語において、第一音節以外の母音はしばしば調音が不完全となり明確な区別を失うことが知られている (たとえば Poppe 1955 p. 24)。ダグール語はその中では、第二音節以後の母音を比較的良好に保存しているほうであるという見方もあるが (Poppe 1955 p. 53)、短母音に限ってみるとやはり同様の傾向は否めない。すなわち第二音節以後、特に語末などでは母音の区別が明瞭さを失い、「どの母音があるか」ばかりでなく、ときには「母音があるかないか」さえ判別がむずかしいことがある。このような音声的実質に対してどの程度の音韻論的解釈を加えることが妥当であるかは、分析者により意見のわかれるところであろう⁶⁾。

本稿では第一音節以外の短母音として /ə, i, u/ の三つのみを認めることにする。このうち /i/ は比較的容易に判別できるが、/u/ は第二音節以後ではしばしば円唇性が弱まって [u̠]~[ü̠] のようになり、/ə/ との音韻的区別を設けるべきかどうかなお検討の余地がないわけではない。実際、本稿でも第二音節以後の短母音 /ə/ と /u/ の区別はしばしば恣意的にならざるを得なかった点がある。しかし次のような発音の区別が注意された。

[amə] 《口》 — [amü̠] 《米, 穀物》 — [æmi] 《命》.

したがってそれぞれを

5) このうち母音 /y/ の例として Z のあげる čyūdən 《マ、チ》 (<Ch. 取灯 qudeng) については筆者も採集することができたが、特に中国語的な響きは感じられず /čuidun/ と解釈される。「取灯」は中国語でもすでに古語とされており、Z 自身「早期借入」(p. 22) の語に分類していることからみて (むしろそれほど古い

借用語とは考えられないが)、発音がダグール語化しているのはむしろ自然である。

6) ちなみに服部1951の蒙古語チャハル方言に対する音韻論的解釈は、体系の簡潔性と整合性を重視した、かなり抽象度の高い分析であるように思われるが、本稿でもいろいろと教えられるところが多かった。

/amə/ — /amu/ — /ami/

と解釈するのである。ちなみに P, M, Z はそれぞれを次のように表記している。

P. am(a) am ami

M. amə amə ami

Z. am / amj

(Cf. Ивановский 1894: ama amo /)

Mは“unstressed syllable”では /ə, i, u/ のみを認めるようであるが⁷⁾、そのような位置（たとえば典型的には語末）の短母音として /u/ が立てられることは、Mの語彙全体を見渡しても実際にはまれであり⁸⁾、/i/ 以外のものはほぼ機械的に /ə/ とされている感がある。したがって上の二つの /amə/ も発音の違いを聞き逃している疑いもたれる。

一方、Zでは非第一音節の短母音として /a, o/ は現われないとされており⁹⁾、特に語末に立ち得る短母音は /ə/ のみに限っている (Z. p. 12)。このことが、たとえば筆者の /ami/ 《命》、/nogu/ 《犬》に対して /amj/, /nogw/ のような、語末の口蓋化子音や唇音化子音を認める結果となっている。それも一つの解釈ではあるが、そのためにZの体系では音節の構造（特に語末の構造）がきわめて複雑・多様なものとならざるを得ない（後述3.1参照）。のみならず、これまでの例からもうかがえるように、一般にZではP, Mならびに筆者が開音節と認める場合でも母音を立てないことがしばしばある。しかしながらそのような場合、実際の発音では子音のあとに弱く短い形ではあるが母音的な開放が聴取されるのが普通であり、これはゆっくりした丁寧な発音ではより明確に現われる。こうした場合にはやはり音韻論的に母音の存在を認めるべきであろう¹⁰⁾。

2.3 長母音と二重母音

長母音と二重母音はいずれも母音音素の連続として解釈される。他のモンゴル系諸言語と同様、ダダール語も母音の長短の区別が音韻論的な意味を有している。次のような対立例が見出された。

kəli 《舌》 — kəəli 《腹》.

jarə 《傷》 — jaarə 《急げ》.

7) これは筆者の見方と同じではない。第二音節以下であっても、“stress”（筆者のみるところでは高さアクセントの山—後述3.2）があれば、短母音 /a, o/ も現われうとするからである (M. pp. 4-16)。

8) Mが語末短母音として /u/ を立てた数少ない例として、kəku ‘son, child’, motaku ‘vulva’, tunku ‘drum’, lonku ‘bottle’, čonku ‘window’

(<Ch. chuanguhu), lontu ‘harness without a bit’ (<Ch. longtou) 等。最後の例を除いてすべて k のあとであるのが注意される。

9) Z. p. 14 参照。ただし、taugalj 《粘土》, gwalanč 《夏天的狗皮》; olloqbəi 《旁边》, dosoləg 《滴》のような表記も散見する。

10) 同様の解釈として M. p. 16, および対象とする言語は異なるが、服部1951 p. 83 参照。

xwarii 《雨の》 — xwaarii 《乾いた》.

第二音節以下であっても長母音の形でなら上述の五つの母音すべてが現われうる。その例についてはすでにこれまでの中にも見出されるので省略する。

二重母音としては、まず /ai, əi, oi, ui/ が認められる。いずれも第二音節以下にも現われうる。

/ ai / : saɪŋ 《良い》 (MZ. sain; cf. P. saixan); mogai 《蛇》 (P. mogoi; cf. Z. mogw).

/ əi / : kəiŋ 《風》 (P. id. MZ. xəin); dəlxəi 《世界》.

/ oi / : čoigilči- 《争う》 (M. čooləči-); šigoi 《森》 (P. sigii, Z. šigee).

/ ui / : kuisu 《へそ》 (P. id., M. kuisə, Z. kuis); xarungui 《暗い》 (Z. id., P. xarangui).

服部1951の報告する蒙古語チャハル方言などと同様、/ai/ がしばしば [æi] ~ [æä] のように発音される (同 p. 86) ほかに、もとの短母音の発音が比較的よく保たれている。ただし半母音 /j, w/ のあと (あるいは /č, ʃ, š/ のあと) に続いた /əi/ は [e:] である。

/ unjəi / [une:] 《雌牛》.

/ aawəi / [a:we:] 《ある》.

そのほかダグール語に特徴的な二重母音 (Poppe 1955 p. 17) として /au, əu/ がある。

/ au / : aulə 《山》 (M. id., P. aul(a), Z. aul).

/ əu / : əudə 《扉》 (M. id., P. əud(ə), Z. əud).

2 4 母音調和

すでに述べたようにダグール語では一般に第二音節以下の短母音が明確に区別されない。母音調和の現象についてみる場合は、特に第二音節以下の長母音・二重母音の現われ方に注意する必要がある。また短母音 /ə/ は第一音節では女性母音としてはたらくが、第二音節以下では中性母音となる。さらに /əV/ (/əə, əi, əu/) は一般に女性母音であるが、/Səi/ (Sは半母音, /jəi, wəi/) の母音は中性である。

結局筆者のみるところでは、各母音および母音連続はその位置 (第一音節と非第一音節) に応じてそれぞれ次のように分類できる。表中の○印は筆者の資料中に単語として実例の見出された組合せである (ただし明らかな借用語を除く)。

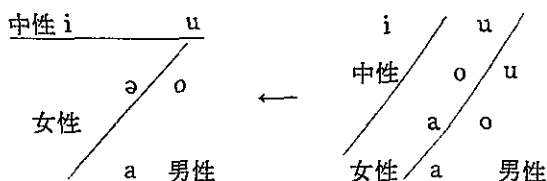
特に第一音節の /i, Səi/ に対して空欄が多いのは、そのような単語の実例が少ないことによる。また第一音節 /o(V)/ (/o/ または /oV/ をこう表わす——以下同様) のあと

第二音節 以下		男 性		中 性						女 性
		aV	oV	u	uV	i	iu	Səi	ə	əV
男 性	a	○	○	○	○	○	○	○	○	
	aV	○		○	○	○	○	○	○	
	o	○	○	○		○	○	○	○	
	oV	○	○	○		○	○	○	○	
中 性	u	○		○	○	○	○	○	○	○
	uV	○		○		○		○	○	○
	i	○	○	○		○	○	○	○	○
	iu	○		○				○	○	○
	Səi			○						
女 性	ə			○	○	○	○	○	○	○
	əV			○		○	○	○	○	○

に /uV/ が、ならびに /u(V)/ のあとに /oV/ がそれぞれ続いていないのは、偶然例が欠けていたとみるべきか、あるいは第一音節の円唇母音のあとでは /uV/ と /oV/ の対立がないとみるべきか、残念ながら確認できない¹¹⁾。

いずれにせよ第一音節の男性母音 /a(V), o(V)/ のあとには女性母音 /əV/ が続かず、また第一音節の女性母音 /ə(V)/ のあとには男性母音 /aV, oV/ が続かないという、かなり弱まった形で母音調和が観察される。

今、第一音節の短母音に限ってみれば、ダグール語の母音は母音調和の観点から下図左のように分類されることになる。



これは、たとえば蒙古語チャハル方言のような広一狭の対立からなる母音調和（服部1975 p. 7）がかつて存在し（上図右）、のちに **o*, **u* および **u* の一部が合流して中性母音 /*u*/ を生じた結果とみられよう¹²⁾。満州語文語にもこれと全く同様の「母音調和衰退」の

11) 仲1980 (p 20, 22, 24) でも第一音節の *o*, *u* のあとにそれぞれ *uu*, *oo* は現われないとされている。

12) ダグール語の *u* が **o*, **u*, および一部の **u* に由来することについては Poppe 1955 p. 17, 31, pp 48-51 参照。

推移がみられる(服部1975 pp. 10-11)のは興味深い。ダグル語ではさらに短母音 *a が第二音節以下で *ə に合流したため、第二音節以下の /ə/ が中性母音化し、いっそう母音調和崩壊の方向へすすんだといえよう。

3. 音節構造とアクセント

3 1 音節

音節は一般に (CXS)V(VXC) という構造をしている(括弧内は随声要素)。音節頭の Cには /ŋ/ を除くすべての子音音素が立ち、音節末のCには /b, d, g, m, n, ŋ, r, l/ が立ちうる。このうちさらに語末に立ちうるのは /ŋ/ のみである。なお /ŋ/ は音節頭に立ちえない以上、たとえば pəŋjoo 《友達》(<Ch 朋友 pengyou) の音節区分は pəŋ-joo であり、pə-ŋjoo ではない。ただし一般には語中に CS があれば、その C のまゝに音節の切れ目がある mo-njoo 《猿》。

M は前述(本稿1 1)の /n̄/ を立てる点を除けば、すべての音節を開音節として扱っている。ちなみに服部1951は蒙古語チャハル方言に対して、/ŋ/ のみを音節末子音として認め、それ以外はやはりすべて開音節であるとする。先に述べたように(2 2)本稿では子音のあとにわずかも母音的な開放が認められれば母音を立てる立場をとったが、筆者の耳にした発音ではすべての音節が聴覚上そのような開放を伴うわけではない。したがってある場合にはやはり閉音節を認めたほうが、体系の単純性は多少そこなわれても、より音声実質に則した音韻論的解釈であると考えられる。そのうえで述べるアクセントとの関連からも、閉音節を立てる根拠が得られるように思われる(3 2参照)。

一方これとは逆に Z では閉音節ないし子音の連続を認めすぎる傾向があり、きわめて複雑で多種の音節をもたらす結果となっていることはすでに指摘したとおりである(本稿2 2)。Z 自身は明確に示してはいないが、その記述から帰納すれば、最も複雑な構造の音節は CSVVCCS のようになろう。これに近い実例としてたとえば, xwarkj 《鍋台》(Z. p. 9) のような「単音節語」があげられる¹³⁾。さらに Z では、/x/ (と外来語音素) を除くすべての子音音素が語末に立ちうることになっているが(Z pp. 4-5)、やはり音声的実質の監視および体系の複雑化の両面から貸成てきない。

筆者の体系では、単音節語のうち最も短い形式の自立語は次のような構造をしている。

/ (CXS)V V / oɪ 《林》, biɪ 《私》, gwaɪ 《腿》

/ (CXS)V ŋ / · iŋ 《挽き臼》, juŋ 《東》。

13) これに該当する単語は筆者の資料にはない。 пищи”。
Cf P xoalkı “очаг, плита для готовки

すなわちモーラ¹⁴⁾という単位でみるならば、この言語の最小の自立形式は2モーラからなるということができる¹⁵⁾。

3 2 アクセント

ダグール語のアクセントは一定の型を有していかなる対立も示さず、したがって音韻論的には無意味である。そのため従来の記述も一般にきわめて簡略で、Pは常に第一音節が強いとし(P. p. 126)、Zはこれに加えて第二音節以下に長母音があればそこが高いとする(Z. p. 13)のみである。Mはやや詳しいが、強さと高さを区別せずに一律に“stress”として論じている点で問題であるのみならず、その位置が“predictable”であるとしながら記述はむしろ個別的で、一般原則をとらえたものとなっていない(M. pp. 4-15)。

いずれにせよ筆者のみるところでは、強さよりもむしろ高さがアクセントの主体をなしており、しかも特に高さに関しては音節よりモーラ単位でとらえるほうが正確で簡潔な記述ができる。それによれば、強めは原則として第一モーラにあり、高さの山はうしろから二番目のモーラ(ただしそこが副モーラにあたるときはその直前の主モーラ)にあるとすれば済む¹⁶⁾。今、便宜上、音韻表記された語形に・を付して高さの山であるモーラ(の母音)を示せば、次のようである。

bii <私>, úsu <髪>; saín <良い>, utáa <煙>, táawu <五>, alógə <網>, áurki <肺>, jujáaŋ <厚い>, njombúsə <涙>, dogulúŋ <ひっこ>, twaarələ <ほこり>, xoŋšóoru <<ちばし>, xaujaarāa <全部>, baagčaaŋ <島>

なおこのように語の音韻構造によって一定したアクセント型は、逆に音韻解釈の手がかりを与えることがある¹⁷⁾。たとえば、ârtə <早い>, kimči <爪>, bəgšɨ <先生>, sarimúltə <眉>等において、それぞれの r, m, g, l のあとに母音がないと解釈される根拠の一つとして、そこに高さの山がないことがあげられる¹⁸⁾。同様に, bajiŋ <富んだ>, xojirə

14) 1モーラをなすのは、①音節頭の(C)(S)V、②VのあとのV、③音節末のCであるとみる。以下での説明の便宜上、①を主モーラ、②③を副モーラと呼ぶ。

15) 同じことが蒙古語チハル方言について指摘されている(服部1951 p. 87)。またZ p. 12では、単音節語が閉音節なら長母音または二重母音が現われ、閉音節なら短母音も現われうるという形で述べられている。

16) ノングース語の一つであるウイльта語の高さアクセントについても同様の一般化がなされた。津曲1983参照。

17) 服部1951 pp. 88-89, p. 101。ただし比較的短

い語では第一モーラの強めの影響で高さの山が聞きとりにくい場合もあり、注音が必要である。逆に長い語の前半には高さの山が来ないので、必ずしも語全体の音韻解釈の助けとなるわけではない。

18) 別の解釈として、これらの子音のあとに母音を認め、それが無声子音の前で無声化するために高さの山になれないとすることも、ある場合には一応考えられる。しかし jərgi <など>, búgdə <全部>, suigaaljɨ <蟻>等の例からみて、高さの山が前へするるのは無声子音の前に限らないのであり、また xalisə <樹皮>, udúsu <羽毛>のように無声子音の前に高さの山が来

《二》等で母音間に j を立てるのも、アクセント型が一つの手がかりとなっている。

4. おわりに

本稿ではダグール語ハイラル方言の採集資料に基づいて、その音韻分析を行なった。はじめにも述べたように、音韻にせよ文法にせよ、分析は調査と並行してすすめられるべきであり、分析に際してたえずインフォーマントの情報や判断を得られることが望ましいのはいうまでもない。本稿では種々の制約から事実上、基礎語彙調査で得られた不完全なデータだけをもとにあとから音韻体系を帰納し、その検証が十分に行なえなかったために、分析上いくつかの疑問点を残したことは否めない。

特に第二音節以下の短母音の認定（母音の有無と種類）については、さらにインフォーマントの情報を得ながら検討する余地があると考えている。また文法に関する調査はごくわずかしかな行なえなかったので、各単語の曲用形・活用形や派生形に対する情報も十分でなく、そのため音韻解釈にあたって形態音韻論的考慮に欠けていることも認めざるを得ない。

その意味で本稿での音韻分析ははまだ試論の域を出ないが、可能な解釈の一つであり、特にこれまでのダグール語音韻論の分析と総合をとおして、体系の整合性と簡潔性の点で多少の前進を示し得たように思われる。

参 考 文 献

- アジア・アフリカ言語文化研究所, 1966, 1967, 『アジア・アフリカ言語調査票』上・下, 東京外国語大学, 東京.
- 服部四郎, 1951, 「蒙古語チャハル方言の音韻体系」, 『言語研究』19・20号, 日本言語学会, 東京, pp. 68-102.
- , 1975, 「母音調和と中期朝鮮語の母音体系」, 『言語の科学』6号, 東京言語研究所, 東京, pp. 1-22.
- 津曲敏郎, 1983, 「ウイラ語のアクセント」, 『アジア・アフリカ文法研究』12号, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 東京, pp. 75-84.
- 仲 素純 (Zhong Su-chun), 1980, 「達斡爾語の元音和譜」, 『民族語文』1980年第4期, 北京, pp. 18-27.
- , 1982, 『達斡爾語簡志』(中国少数民族語言簡志叢書), 民族出版社, 北京.

る例もある。なお上例中の *ârta*, *bâgsi* に対するチャハル方言の対応語について、服部1951 p. 89 はやはり音調を手がかりとしながら、子音のあとに母音を認める解釈を示している。そ

の根拠となった「最後の音節」の「急な降り音調」は筆者の資料では聞かれず、むしろ第一音節が下降調である。

- Jernakov, V. N., 1974, "Dagurs in Northeast China", *Zentralasiatische Studien* 8, Otto Harrassowitz, Wiesbaden, pp. 407-422.
- Martin, S. E., 1961, *Dagur Mongolian: grammar, texts, and lexicon* (*Uralic and Altaic series* 4), Indiana University, Bloomington.
- Poppe, N., 1934, "Uber die Sprache der Daguren", *Asia Major* 10, Leipzig, pp. 1-32, 183-220.
- , 1955, *Introduction to Mongolian comparative studies* (*Mémoires de la société finno-ougrienne* 110), Helsinki.
- Ивановский, А. О., 1894, *Mandjurica I: образцы солонского и дахурского языков*, Санкт-петербург [reprinted in 1982, *Akadémiiai kiadó*, Budapest, with a foreword by G. Kara; *Materials for Central Asiatic and Altaic Studies* 2].
- Поппе, Н. Н., 1930, *Дагурское наречие*, Ленинград.

SUMMARY

The present paper on Dagur phonemics is based on the materials which I collected from a speaker of Hailar dialect during his stay in Japan. We have already had a few phonemic descriptions of Dagur, but they are less systematic and simple than mine.

I set up the following phonemes:

Consonants /p, t, k, b, d, g, m, n, ŋ, r, l, s, č, j, š, x/

Semivowels /w, j/

Vowels /i, ə, a, o, u/

Labialized or palatalized consonants are interpreted as /Cw, Cj/ respectively. The vowels are fully distinguished in the initial syllable, while the non-initial syllables have only /i, ə, u/ as the short vowels. All the vowels can be geminated to form the long vowels, and some combinations of two different vowels make the diphthongs /Vi; au, əu/. After the semivowels or /č, j, š/, the diphthongs /əi/ has the phonetic representation [e:].

Dagur shows a reduced type of vowel harmony: /a(V), o(V)/ in the initial syllable is not followed by /əV/, while the former does not follow the initial syllable /ə(V)/.

The syllable structure is generally represented as (C)(S)V(V)C, where the initial C may be any consonant except /ŋ/, and the final C may be /b, d, g, m, n, ŋ, r, l/. Among them, only /ŋ/ can stand at the word-final position. If we admit a time-based unit 'mora', which takes the form of either (1) a syllable-initial (C)(S)V or (2) a postvocalic V or a syllable-final C, we can say that all the shortest words in Dagur consist of two moras.

In terms of this unit, the non-phonemic accent in Dagur is generalized as

follows: the stress, in principle, falls on the first mora, and the penultimate mora has the highest pitch; if the penultimate mora is the non-initial type (i. e. type (2) above), the preceding syllable-initial mora will be pronounced the highest. The non-phonemic pitch pattern is sometimes useful in the analysis of the phonemic structure of words.

執筆者紹介

AALTO, Pentti	Professor emeritus, Department of Asian and African Studies, University of Helsinki
天 野 哲 也	文学部助手 (考古学)
浅 井 亨	富山大学人文学部教授 (言語学)
BENZING, Johannes	Professor emeritus, Seminar für Orientkunde, Johannes-Gutenberg-Universität in Mainz
DOERFER, Gerhard	Professor, Seminar für Turkologie und Zentralasienkunde, Georg-August-Universität Göttingen
林 謙 作	文学部助教授 (考古学)
JANHUNEN, Juha	Research Assistant, Department of Finno-Ugrian Studies, University of Helsinki
KARA, György	Professor, Department of Inner Asia, Eötvös Loránd University of Budapest
MENGES, Karl H.	Professor (retired), Columbia University Lektor, Institut für Orientalistik, Universität Wien
宮 岡 伯 人	東京外国語大学教授 (言語学)
大 井 晴 男	文学部教授 (考古学)
大 島 稔	小樽商科大学短期大学部講師 (言語学)
PRITSAK, Omelyan	Professor, Ukrainian Research Institute, Harvard University
佐 伯 有 清	成城大学教授 (日本史学)
津 曲 敏 郎	文学部助手 (言語学)

北方文化研究第17号

昭和60年7月15日 印刷

昭和60年7月22日 発行

札幌市北区北10条西7丁目

編 集 北海道大学文学部附属北方文化研究施設
(施設長 永井秀夫)

発行者 北 海 道 大 学

印刷者 美 季 出 版 社

札幌市北区新琴似7条14丁目1-22